二〇一二年一〇月一三日

百選の夕陽に佇ちて秋惜しむ　雅流
名残の茶四百年の宴れ釜　わかば
大琵琶へなだれて山の粧へり　せいじ
大なる洞もて木の実降らせけり　なつき
堀めぐる女船頭爽やかに　雅流
駿河へと富士を跨いで鰯雲　とろうち

二〇一二年一〇月一二日

石仏を撫でゐる風の秋桜　菜々
な踏みりここだ銀杏寺の庭　ぽんこ
ハーモニーなせる読経や秋気満つ　英子
火のごときビルの玻璃窓秋夕焼　百合
美術館梯子し秋を惜しみけり　はく子
鰯雲大吊橋の揺れに揺れ　せいじ
いづくより木犀の香や夜散歩　うつぎ
吾はホ句夫はスケッチ秋日和　さつき

二〇一二年一〇月一一日

コスモスの風縦横に般若寺　きづな
コスモスに見え隠れする石仏　はく子
切れ長のおん目さわやか白鳳仏　菜々
山彦や祭太鼓を撥ね返す　うつぎ
浦夕べ白銀光り鰡跳べる　よし女
稔り田の朝日に映ゆる湖国かな　せいじ
禅寺のしじまを破り鵙高音　さつき

二〇一二年一〇月一〇日

畦に吸ふ煙草一服蓼の花　うつぎ
吹かれつつ草にすがりて枯蟷螂　とろうち
白壁に色まき散らす秋桜　せいじ
秋日濃し吾が影踏みて橋渡る　三刀
塗替へて白き学び舎小鳥来る　満天

二〇一二年一〇月九日

米櫃を干し新米を満たしけり　あさこ
個性派の絵画のごとし秋の雲　美咲
古書市にレコード盤や秋うらら　ぽんこ
片脚は富士の裾野へ秋の虹　とろうち
幾筋も立つ田じまいの煙かな　有香
庭師らの去りたる庭に秋蝶来　あさこ
澄む池を矢のごと走る影は何　なつき
貌傾げ吾をいぶかる蟷螂かな　うつぎ
これこそは故郷の味むかご飯　ともえ
新松子坑夫の像の肩を打ち　よし女

二〇一二年一〇月八日

傾ぐ日にグラデーションや秋の雲　こすもす
百舌猛るしたに目つむる坑夫像　三刀
この村にポストは一つ蕎麦の花　よし子
秋祭男冥利の陣太鼓　宏虎
峡の日のいま届きたる薄紅葉　有香
露座仏の供花はバケツの萩すすき　菜々

二〇一二年一〇月七日

畑一面海へなだるる秋桜　せいじ
運動会貴賓テントに杖並ぶ　宏虎
吟行の余録夕餉の栗の飯　有香
気に入りの盃温め酒溢れしめ　よし女
泥煙上げたるはなに池澄める　さつき
裏畑の柿に盗賊鴉どち　あさこ
百歳の手押し車に供花の菊　うつぎ
高低の脚立ふたつや松手入　あさこ
相互ひ久闊を述ぶ秋灯下　はく子